

人権なら

2019年8月1日

第104号

NPOなら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

9月7日に第11回研究集会

生きづらさに寄り添った地域づくりを考えよう

第11回奈良県「差別と人権」研究集会が9月7日に

開催される。それに向けた実行委員会の初会合



が6月28日、第2回会合が7月11日、それぞれ田原本青垣生涯学習センターで開かれ、準備状況を確認した。(写真は昨年の研究集会)

私たちを取り巻く政治、経済、社会などの分野で先行きの見通せない状況が今、広がっている。人々は不安と生きづらさを募らせている。2016年に津久井やまゆり園事件が起きた。2018年には国会議員によるLGBTへの差別・偏見に満ちた主張が社会を騒がせた。世界3位の経済大国を誇りながら、貧困率は高い。全勤労者の37%は非正規雇用に置かれている。

「引きこもり」現象は有効な施策が施されないまま「家庭の問題」とされている。2016年の内閣府調査は60万人と発表。40～60歳の「引きこもり」が多い。俗にいう「8050」問題が新たな社会問題となっている。

中川健史さんが講演「引きこもり、貧困、就労」

こうした状況下にあって、開催要綱は、「不寛容な社会」は社会の構成員である「私」が変わることで変えることができる、と述べ、集会参加を呼びかけている。

今年の研究集会のテーマは「生きづらさに寄り添い、やさしさとぬくもりのある地域づくり」。記念講演は、中川健史・一般社団法人「よりそいネットワークぎふ」代表理事が「引きこもり、貧困、就労から社会を考える」

をテーマに話す。中川さんは1980年頃から、「地域塾」を生業に「非行」少年たちと、90年代には不登校の子どもたちと関わる。93年、不登校の子どもと親を支える「べんぼすた」を立ち上げ。03年には引きこもる若者たちの交流の場「学び座」、07年には「仕事工房ポポロ」を設立。年間200件近い相談を受けるなか、抱える困難さの複雑化、重層化とともに、引きこもりの高齢化を痛感する。人との出会いと格闘、そして地域づくりへの熱い思いを刺激的に語っていただく。

尾辻かな子議員が性的マイノリティ問題を提起

第1分科会は「社会的孤立—つながり支え合う地域づくり」がテーマ。中川さんがコメンテーターを務める。報告は、田中和博さん(県社会福祉協議会主任相談員)が「困窮者自立支援法」の背景とともに、奈良における現状や課題を、明見美代子さんが「なら人材育成協会」の立ち上げから現在に至るまでの活動を、それぞれ話す。コーディネーター・司会は山口まゆみさん(行政書士・FP・終活カウンセラー)が務める。

第2分科会は「仲間との出会い、LGBTQや優生保護法裁判を考える」がテーマ。渡辺哲久さん(ひまわりの家・常務理事/三宅町議員)がコーディネーター・司会を務める。尾辻かな子・衆議院議員(LGBT政策情報センター代表理事)が政治の場での性的マイノリティの可視化と政策による解決を目指す活動の報告と、『新潮45』(2018年8月号)での杉田水脈(みお)論考への批判を述べる。また、ピープルファースト奈良の仲間たちが「優生保護法裁判」への支援活動の報告と、5月28日の仙台地裁判決への思いなどを映像を交えながら語る。

実行委では、多くの人たちが研究集会で学びあい、語り合う「共感と連帯」の場にしたい、としている。

三宅町人権学習講座が開講

山口まゆみさんが「8050問題」を語る

第1回三宅町人権学習講座が7月9日に開講した＝写真。本講座はNPOなら人権情報センターが三宅

町から事業委託を受け、企画・運営する。古川友則・理事



長があいさつ。吉田陽介・町社会教育課長が「今年度から町職員研修としても実施している」と述べ、全6回にわたる講座への参加を呼びかけた。

この日は山口まゆみさん(行政書士)が「8050問題」ってご存じでしょうか?をテーマに話した＝写真。

山口さんは「あかるいみらい準備室」を2年前に開設。障がい者・引きこもりなどの当事者の「親亡きあと問題」や、親御さんの「老い支度」などの相談窓口を運営している。活動の柱は①親・家族への個別無料相談・出張相談②親・家族のための「親亡きあと」「老い支度」をテーマにした勉強会の開催③市民に対する障がい者及び障がいに関する理解啓発活動など。

「引きこもり」は、様々な要因で社会参加(就学・就労・交友など)をせずに、原則6ヵ月以上にわたっておおむね、家庭にとどまっている状態を指す。40～64歳の引きこもりは推定61.3万人(今年3月内閣府調査)。また、15～39歳の「若年引きこもり」は推定54.1万人(2015年度内閣府調査)を数える。

「引きこもり」に対する「相談窓口」を開設

引きこもりになったきっかけの多くは、「退職したこと/人間関係がうまくいかなかった/病気/職場になじめない/就職活動がうまくいかなかった」などだという。「相談窓口」を開設し、初めて出会う現実に戸惑い、驚いたことは、ロストジェネレーション世代(1970～1982年頃出生世代)の子の引きこもり相談が多いことや、病気や就職後の人間関係でつまづく人や、長期化し

た引きこもりの人は、家族だけで抱えているケースが多いことを指摘。また、「親の外界との接触を拒む(行動の制限・監視)」などや、「家族への暴言・暴力」や、「長期にわたって入浴・着替えをしない」「極度に衛生に気を使うケース」などについて話をした。



「8050問題」は、引きこもりの長期化、親子とも高齢化した状況で、収入が途絶え、病気や介護のがのしかかり、一家が孤立し、困窮するケースが顕在化している、として、「同居の親の老化に危機感」を持っていることや、「もう一度立ち上がりたい」という相談、「相談窓口」アンケートの「子ども(家族)について不安に感じていること」などを紹介した。

最後に、自身が「ロストジェネレーション世代」で就職が出来なかったことに触れ、「引きこもりは特別な家庭、特別な人、障害を抱えた人や生きづらさを抱えた人」だけの問題ではない。この問題を共に考え、「みんなの、私にできることが集まれば」きっと大きな力になり、住みやすい地域社会づくりにつながる、と結んだ。

直近に起きた悲しい諸事件もあって、会場は参加者で一杯になり、たくさんの質問、意見が出た。「とても分かりやすいお話でした」の声も寄せられた。

■元気に「かいほう塾」やっています

5月21日の開講式・第1回学習会で始まり、1学期は7月18日に終

了。夏休みに入った。生徒は多い時は18人が参加＝写真。講師は、



式下中学校の先生、トライの講師、大阪教育大学生がボランティアスタッフとして参加している。生徒たちは7時過ぎには三宅町中央公民館に来て、宿題や課題学習に取り組んでいる。午後8時30分には終わる。

8月は「夏教室」として、26・27・28日午後3時～5時。三宅町中央公民館。電話1:0745-43-2260。

地域の歴史に学ぶ人権教育

部落解放・人権研究所が人権パートナー講座

奈良部落解放・人権研究所が7月18日、田原本町にある「道の駅 レストィ唐古・鍵」で第1回「人権パートナー養成講座・基礎コース」を開講した＝写真。

開講式のあと、奥本武裕・県立同和問題関係史料センター所長が「地域の歴史に学ぶ人権教育」をテーマに講演した。

奥本さんは同センターの紹介や、いわゆる「人権三法」のほか、3月に施行された「奈良



良県部落差別の解消の推進に関する条例」を紹介したうえで、20世紀後半以降、「人権概念が拡大」し、多様な人権課題が提起されるようになり、合意が進展してきた。「部落問題(同和問題)も、多様な人権課題のひとつ」として取り組むことが重要だ、と語った。

外見・所作・言葉・職業で特定できない

続いて、「部落差別はネットの中で起きているのか」と設問。裁判中の「鳥取ループ」問題を取り上げた。戦前、中央融和事業協会が発行した「全国部落調査」を「鳥取ループ」がウェブ上に公開した事件を説明し、朝日新聞(5月5日付)の掲載記事「通わぬ言葉 3 さらされた『部落リスト』/タブー意識 語られぬ差別」で、「東海地方の20代女性が両親に結婚相手を紹介したのは、昨年末のことだ。家族のお祝いムードは、父親のネット検索で一変した」を紹介。「問題の本質はネットにあるのだろうか」と問い掛けた。

県が実施した意識調査(2009年、2018年)「お子さんの結婚相手が同和地区出身者であった場合、どのような態度をとると思うか」(ほぼ数値が大きく変動がない)や、2009年に実施された「県内地区実態調査」-「居住開始の時期」を紹介し、「明治以降、部落に移住してきた人々のうち、相当数が非部落からの移住

であったと推測される」と話した。

つまり、こうした事件は「どこが部落か。誰が部落出身か」といったことに関わる問題であり、「ほとんどの人はどこが部落か」といった正確な知識を持っていない。「外見や所作、言葉、職業で誰が部落出身者」であるかを特定できない。

そういったことから、本人が「部落出身」ではなくても、あるいは、そう認識していなくても、周囲からそのように見なされ、忌避や排除の対象とされることがあり得る、と話した。

特定の人々を抑圧、排除しない地域社会を

続いて、「部落史の見直し」の概要を「教科書記述」の変化を通して説明。見直しの成果から部落差別とは、「部落内外の社会的関係の問題」、言い換えれば、「被差別部落と周辺地域社会の間に取り結ばれる結合のひずみやねじれ、あるいは断絶の問題」とした。

最後に、「地域社会の特質」として、磯城郡田原本町の地域史を紹介。①共同・共生の場としての地域社会——生産活動、堤防の修復などの防災や信仰を共にする結びつき、それらをもとにした地域振興。②抑圧・排除の場としての地域社会——墓郷と三味聖の活動などや、江戸時代の田原本町域の地域社会と穢多村、水国争闘事件などを紹介した。

奥本さんは、私たちが暮らす地域社会の持つ二つの側面を深く理解することが重要。一人ひとりが特定の人びとを抑圧したり、排除したりしない地域社会を築いていこう、と述べて、話を終えた。

■ 新井英一ライブ/タルマジ(大阪桃谷)で

新井英一ライブが7月21日、大阪・桃谷にある韓国伝統茶房「タルマジ」であった。奈良からも多くの知人が駆け付けた。新井さんは「チョンハーへの道」「花」(喜納昌吉)などを熱唱。高橋望さんもギターを奏でた。



学校に行く行かないを考える

「のこのこの会」が不登校を類型化し語り合う

第1回子どもと学校について考える会(「のこのこの会」)が6月29日、三宅町上但馬団地「人権センター」で開かれた。

テーマは「学校に行く/行かないを考える」。



臨床心理士の2人がコーディネートした。会合は「参加者交流・家族の思いを語る場」として設けられた。主催は一般社団法人なら人材育成協会。

会合を開くきっかけは、5月に放映されたNHKスペシャルのシリーズ「教室の声なき声」だった。教育の現場で新たな課題が表面化し、関係者に衝撃を与えたのだ。内容は「登校しても教室に入れない」「教室で苦痛に耐えているだけ」という“隠れ不登校”ともいえる中学生が推定で約33万人もいることが明らかになったこと。このことを受け、「のこのこの会」を立ち上げた。

会合では、まず自己紹介+嫌いな教科を紹介。少し緊張がほぐれたところで「短時間のグループトーク」。

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

トランプ米大統領が公然と人種差別発言をした。他党の議員らに「この国が気に入らないなら出て行け」と言い放ったのだ。こうした分断・対立を煽り、熱狂的支持を集める手法を採る指導者が増えた。これに勇気づけられ、他人や他国をけなすことに喜びを感じる人たちも増えている。先日、映画「主戦場」を観た。慰安婦問題を扱ったドキュメンタリーだ。否定派と肯定派の主張を採り上げている。否定派には人権意識が微塵もない。史実を平気で改ざんする。対話が成り立たない人々とどう関係すれば良いのか、と考えてしまう。多様性が認められない社会は、まっとうな社会ではない。

少し休憩を入れ、「不登校」という意味について思いを馳せる。類型化して、さらに思いを馳せることにした。

類型化として、A「行きたいと思うがどうしてもいけない」(過剰適応型—優等生の息切れタイプ)。B「行かなくてはと分かっているが行けない」(受動型—生徒集団の荒々しさや、教師の指導などに委縮するタイプ)。C「行くと叱られる場面が多いので行きたくない」(衝動統制未熟型—孤立感を抱き、意欲を失いがちなタイプ)。D「行きたくないから行かない」(怠学・無気力型)。E「行けないから行かない」(経済困難型)。F「怖くてとても行けない」(特定不能または混合型)。

また、発達障害の二次障害としての不登校問題についても、具体的な場面状況を交えて説明した。

そのあと、不登校の子どもを持つ家族が子どもの状況や学校とのこと、国や行政の支援の在り方などについて意見を述べ合った。和やかに話は広がった。

「なら人材」の明見さんは今後も継続したいと言う。こういった場が地域に根付いていけば、と思う。問い合わせは同協会0745-67-0104(明見美代子)。

■三宅町・学童保育クラブで恒例の「紙芝居」

「紙芝居」でお馴染みの鈴木常勝さんが7月25日、「花咲かじじい」や、一番人気のこわーい話「こんな夜」などを実演した。学童クラブの子どもたちは元気一杯の笑顔を見せ、振る舞われた水あめや、ミルク・チョコせんべいに大喜びしていた。



ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail:info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/